広報
アノロ
平成29年11月1日
第102号
栗山町開拓記念館

栗山町の各地域略史

栗山町開拓の祖、泉麟太郎翁が最初の入植地室蘭から新天地を求めて栗山の地に再入植したのは明治二十一年（一八八八）の事である。

由仁町側から現角田神社の裏の夕張川を渡り上陸したのが、アイヌ語でアノロ（阿野呂）と呼ばれていて未開の地であった。

アイヌの人々が呼んでいたこのアノロという地名はかなり広範囲で、現在の角田周辺・南学田から大井分・継立・旭台方面さらに栗山市街地あたりもそう呼ばれていた事が文章等に散見する。

入植した泉翁は明治二十三年（一八九〇）村名を自身の故郷である宮城県角田を忘れる事のないよう角田村と公称し、認可されて設村となった。

以後全国からの入植者達はこの角田を中心として開拓を進め、今日の栗山を築きあげたのである。

又泉翁と同じく明治二十一年（一八八八）五月にアノロとハサンベツにも入植した人達がいた。

◆阿野呂

当時登川村（後に夕張村）に属していたアノロの地にも毛利藩士（山口県）であった林梅五郎等が入植した。

アノロは角田と共に最古の入植地の一つであり、夕張川とアノロ川にはさまれた平坦な土地で栗山では最上の豊穣な地であり、有力者達が相次いで農場を開設した所である。

この地は明治三十年（一八九七）角田村に編入となった。

◆桜丘

市来知（三笠）の空知集治監の剣術指南で水戸藩士であった渡辺大助は、道路、鉄道等の工事で酷使され脱走する集治監の囚徒を追って何度か栗丘のトンネル付近まで来ているうちに、そこから見る馬追原野やアノロ原野の景観に魅せられていった。

明治二十一年集治監の職を辞し、現在の自動車学校付近に居を構え入植した。

以後渡辺は道路整備、鉄道敷設、さらに栗山小学校の前身を作る等この地区の発展に多大な功績を残した。

この地には御大師山があり栗山公園として整備され、地名となった桜の木も多く町民憩いの場となっている。

又東方面は境界線も複雑でウエンベツ川以北は栗沢村の所属であったが、明治三十九年（一九〇六）地番も整備され栗山に編入された。

◆富士

旧字名はアノロであったが、南から富山・下角田・高瀬と通称で呼ばれていた。

明治二十五年（一八九二）頃、富山県人の集団が入植し富山、角田より夕張川の下流に入植したので下角田、水稲作りに功労のあった高瀬和三郎の性に因み高瀬と呼んだ。

最初は真成社貸下げ地となっていたが、その真成社の解散によって福井・高瀬・泉等の所有となり、その後幾多の変遷があり農地解放前には今井農場、小林農場、堀田農場となっていた。明治二十五年（一八九二）鉄道が敷設され、翌年踏切が設置されると、農場の開発は一層促進されていった。

◆中里

角田と栗山との中間地域であることから中ノ里と呼ばれている。

他説には実吉農場主の郷里、鹿児島県伊作村の中ノ里に由来しているともいう。

この地も旧字名はアノロであり真成社の貸下げ地で、主として北の方から実吉、福井、高木、助川等の各農場が創設され土地改良も進み、平坦な美田が広々と続いている。

昭和二十四年（一九四九）都市計画の指定を受け日赤栗山病院、栗山高校、栗山町役場も当初の字名は中里であり市街化が進んでいった。

◆湯地

旧字名はウエンベツ、栗山、栗沢村台山等と呼ばれていて、ウエンベツ川以北は明治三十九年（一九〇六）まで栗沢村に属していた。

湯地定基は鹿児島藩医の子に生まれ、藩命によってアメリカ、マサチューセッツ州立農耕大学に留学し、クラーク博士の指導を受けた。帰国後は開拓使でケプロンらの通訳、そして七重官園の場長、大主典、少書記官、根室県令などを歴任し、元老院議官、貴族院議員を務めた。

明治二十四年（一八九一）退官後貸下げを受け、赤羽留蔵、森啓蔵などが管理に当り、その後は子息が歴代農場を受け継いでいる。

この地区も王子製紙（株）の林木育種研究所（現在閉鎖）や青少年会館、統合栗山中学校等が建設され、又宅地化も進み教育、文化の中心地となっている。

湯地　定基

◆森

旧字名はウエンベツ、栗山、ポンウエンベツとなっていた。明治三十年（一八九七）、富山県人が入植し、木材を出したり、木炭を生産したりしていた。

明治三十四年（一九〇一）、道庁を退官して湯地農場の管理をしていた森啓蔵は、この地の貸下げを願って開墾に努めた。

明治四十四年（一九一一）に無償付与となって森農場が創設された。

現在の森は、谷間を除いて昔ながらの畑作地であり、なだらかな丘陵地帯である。

◆鳩山

旧字名は栗山、ウエンベツ、ポンウエンベツとなっている。又夕張と空知の郡界であり先史時代の遺跡の最も多い所でもあって多くの出土品が発掘されている。

明治二十七年（一八九四）、衆院議長、早稲田専門学校の校長で弁護士でもある鳩山和夫が数名と、共同出資で翌年から開墾した共同農場が始まりである。明治三十六年（一九〇三）には共有を廃して鳩山家単独経営となった。

農場は畑作と牧場の目的で創設されたが低地帯の畑は自然流下水の水田農業に変わり、流域の開発が進むと水が涸渇するようになり大正十五年（一九二六）貯水面積四ヘクタールの大貯水池が完成し、豊かな田園地帯となった。

◆雨煙別

雨煙別は広範な面積を占めていたが、現在は雨煙別川流域で、東部は山地や丘陵が大部分を占め旧字名はポンウエンベツ、ウエンベツであり栗沢村に属していた。

明治三十九年（一九〇六）、旧ポンウエンベツ川（学田川）以北が栗山に編入となった。

本町の創成期には度重なる水害を避けて丘陵地であるこの地に着目するものが多く、団琢磨や谷田清次郎、高木農場等の大小地主によって支えられてきた。

個人では稲葉助右エ門が明治二十五年（一八九二）に岩見沢から鉄道工事づたいに入地し、この地の開墾や子弟の教育等に多大な足跡を残した。

◆緑丘

雨煙別から派生した通称名であり、旧字名はウエンベツ、ポンウエンベツとあって、そのポンウエンベツが緑丘にあたる。昭和十年（一九三五）の字名改正では雨煙別となっているが、広すぎるため緑丘の通称名ができたという。